



あなたとの時間

私はどうして、ここにいるんだろう。

静寂に包まれたカフェで、ふとそんなことを思う。微かに聞こえてくるピアノ音楽に、香ばしいコーヒーの香り、カチカチと控えめに音を立てる古びた掛け時計の秒針、それらをまとめているのが彼女の存在。でも、その彼女が今日はいない。

彼女はいつも決まった時間に、このカフェを訪れる。商店街の途中、細い路地に入るとこのカフェはある。無口な初老の女性が店主で、この店も店主と同様、沈黙しているように静かだ。静寂に包まれたこの店にいと、私は、時間を忘れてゆく。

そして、このカフェに通い始めて、彼女の存在に気づいた。私は、暇があればこの店に来る。彼女のことは気になるけれど、この店のコーヒーは、美味しい。そして、シフォンケーキは、しっとりとして懐かしい味がする。

ドアベルが鳴り、ちらりと視線を文庫本から上げると、彼女が私をちらりと見た。軽く会釈され、驚いて私は、会釈とも頷きともつかない曖昧な感じで、頭を動かした。彼女は、そんな私の戸惑いに気づくこともなく、いつもの窓際の席に座る。私の席が、店の一番奥。彼女は、私より二つ手前の席。彼女のすらりとしたシルエットや、ストレートの黒髪が、窓から差し込む、光を受けてつやつやして見える。

「カプチーノと、シフォンケーキを下さい」

彼女が店主に、注文をしている声が耳に入ってくる。柔らかな優しく甘い声。彼女が、店主の耳元に囁き、それに店主は数回頷いた。そして、店の奥へと消えていく。彼女は何を店主に話したのか気になり、文庫本の開いたページにある一文章を、暗唱できるほど私は繰り返し読んでいた。

「ここ、座ってもいいですか」

ふいに、頭上から聞きなれた声が、降ってきて驚いて私は、顔を上げた。視線の先に、背を向けて座っていたはずの彼女が、私の目の前に立って微笑んでいる。夢かと思うけれど、踏みつけた足は痛かった。私は慌てて、ど、どうぞと、消え入りそうな声で、返事する。彼女は、コートと分厚い文芸書を手に私の前に座る。彼女は、視線を窓に向けて、眩しそうに目を細めて外の光景を見ている。私は何を話していいか分からず、カプチーノを一口飲む。

ふいに、こんなどうでもいい考えが、頭に浮かんだ。そのことを、彼女に言おうかどうしようか迷う。それはこんなことだ。この店のカプチーノは、甘いけれど、微かに舌にほろ苦い味が残るのだと。